

ラジオNIKKEI ■放送 毎週木曜日 21:00~21:15

マルホ皮膚科セミナー

2016年3月31日放送

「第67回日本皮膚科学会西部支部学術大会 ①

大会を終えて」

長崎大学大学院 皮膚病態学
教授 宇谷 厚志

今学会のテーマ

『本質を見抜く : See through the Essence behind Common Knowledge 』

去年の秋、平成27年10月17日と18日に、長崎市の長崎ブリックホール・長崎新聞文化ホールにて第67回日本皮膚科学会西部支部学術大会を開催しました。この2日間で800人を超す参加者があり無事盛會裡に終了できました。

学術大会のテーマとしまして、日常診療の中で「こう言われているけど本当かな？」と思うことがあります。医療はエビデンスを重視しようという流れになって来ています。そのエビデンスを求めるために、すべての疾患、項目について自分で検討するわ

けにいけないので、良質の論文を広く渉猟することが唯一の道と言えます。最近ではネット検索が進んでいて、論文は簡単にかつ遅れることなく読むことができます。それに伴い、ガイドラインが盛んに作成され、個人がエビデンスを得る手間を大幅に省いてくれています。またフローチャートに従えば専門科と同じ診療を行えることが可能な疾患も増えてきました。しかし気になる項目や、そもそもエビデンスレベルの低い論文しかない疾患もまだまだあ



り、自分の考えで診療をしなくてはならない部分は少なくありません。

これまでの先達の残した経験を尊重しつつ、なぜこの方法が行われているのか？ベストな診療はなにか？帰納法は通用するのか？などの疑問をもつのは大切です。しかし忙しい日常診療ではそのような余裕は、まず無いと思います。そこで本学会をそのような場にして頂ければと思いました。

今回の学会は『本質を見抜く：See through the Essence behind Common Knowledge』をテーマに掲げ、多忙な日常診療のなか、好奇心を刺激する学会になればとの思いを込め企画しました。今大会は、招待演者にご無理をお願いし、できるだけ「疑問形のある演題」にしてもらいました。これだけは覚えて帰ろう（take home message）と思った時に有用と思いました。さらに学会メモ用ノートを無料配布し、必要な参加者に適宜活用してもらいました。

学会内容の詳細

招請講演は、米国・コロラド大学デンバー校皮膚科教授の藤田真由美先生に、「アメリカでのメラノーマ治療と研究：パーソナライズド・メディスンはどこまで有効か？」と題し、ご専門のメラノーマ研究を中心にご講演頂きました。米国で先行して実施されている分子標的薬、免疫チェックポイント薬をわかりやすく御講演いただき、薬剤耐性を起こす1つの機構として注目されているメラノーマの cancer stem cell を同定しようとする試みの話は刺激的で興味深いものでした。米国で臨床教室の教授になられた先生の、失礼ながら非常に女性らしい話し方・外観のうらに秘められた、知的好奇心への食欲さという本質が垣間見えた気がしました。

教育講演は「EB ウイルス関連疾患」と「紫外線高感受性疾患」の2つだけに絞り、基礎と臨床のそれぞれの視点から講演して頂きました。

「EB ウイルス関連疾患」では藤原成悦先生にヒト化マウスを開発しそれを用いた感染様式の解明は基礎研究の有用性を実感させて頂きました。岩月啓氏先生にはば広く EBV 感染症の皮膚疾患、特に先生が見出された種痘様発疹症をはじめ、種々の病態を講演頂きました。

「紫外線高感受性疾患」では、荻朋男先生（名古屋大学環境医学研究所発生遺伝分野）に XP やコケイン症候群の分子診断法の確立に至った世界をリードする研究の御講演を通して、基礎研究と臨床分野の synergistic collaboration を実感できました。錦織千佳子先生（神戸大学）に XP の日本における現状、臨床面での特質などわかりやすく御講演頂き、これから大きく発展する分野であると思いました。

シンポジウムでは4つを企画し、私の研究テーマである「細胞外マトリックス疾患」のほか、「進行期皮膚悪性腫瘍の治療戦略」、「見逃してはならない感染症」、「皮膚病理学」を第一線で活躍されている講師に講演して頂きました。

「細胞外マトリックス疾患」では岡本修先生にデルマトポンチン、茂木精一郎先生に強皮症の線維化、岩永聡先生、大久保佑美先生に弾性線維性仮性黄色腫、籾持淳先生にエーラスダンロス症候群の講演をして頂きました。「進行期皮膚悪性腫瘍の治療戦略」では、並川健

二郎先生にメラノーマ分子標的薬、福島聡先生にイムノチェックポイント治療薬、村田洋三先生にメラノーマ以外の皮膚癌の化学療法、鋤塚大先生に血管肉腫、米倉健太郎先生にATLの講演をして頂きました。「見逃してはならない感染症」では、岩田洋平先生に壊死性筋膜炎、富村沙織先生に真菌感染症、山口さやか先生にハンセン病、高垣謙二先生にリケッチア感染症を御講演頂きました。「皮膚病理学」では、玉田伸二先生に表皮内メラノーマ、安齋眞一先生にケラトアkantoma、陳科榮先生に血管炎、大塚幹夫先生には菌状息肉症を御講演頂きました。4つのシンポジウムの入場者はみなほぼ同数であり、広く参加者が興味を持てる企画ができたと考えました。

ワークショップは、西部支部の各大学から臨床・基礎を問わず研究成果を報告していただく企画を作りました。昔から「大学は研究する場」と認知されていますが、最近、研究は専門医の”次のレベル”という考え方が多くなっています。一方で大学に「研究することを期待している」声もはっきりと聞きます。時間的、人的な制約の中で行われている研究を発表していただきました。西部支部から16もの多くの、バラエティーに富んだ特色ある演題が出されました。しかも発表を1～2題ずつ「臨床報告」に関連しているセッションの初めにはめ込みました。このことで、研究に触れにくい先生にも少しでも研究を紹介するという目的が達成できたと考えます。研究している先生が少しでも多くの参加者の前で発表する場を支部総会で作ることができました。研究する先生が小さくとも明確な達成感を感じることに役立ったのではと考えています。これが、本質は何かを考える「好奇心」あふれる皮膚科医師の芽生えになれば嬉しく思います。

一般演題は、153題の一般演題、そのポスターも同時に作成して頂きました。時間の許すかぎり自由な雰囲気ですべて質問をして、診断名がその場で変わるくらいの熱心な討論を行っていた会場も見られました。学会の本当の目的、「本質に向かう自由な討論」が少しではありますが見られました。

学術文化講演はブライアン・バークガフニ先生に「長崎居留地と西欧医学の発展」を御講演頂きました。長崎を1地点だけ西



欧に開いた江戸幕府の思いと、明治になりそこから西欧医学が発展する流れを講演して頂きました。外界との完全断絶は将来のあらゆる可能性を0%にしてしまう危険性があり、1%でも交流を持続することは変化に順応するために必要なのだと考えました。

呈茶として、長崎大学歯学部茶道部の皆さんにお願いして、私の実家で母が教えている裏千家流のお茶を点でて頂きました。お菓子は「桃カステラ」という長崎和菓子で不思議な菓子ですが、美味しかったです。疲れた前頭葉に糖を送り込んで、お茶ですっきり血糖値を下げて「いざ会場へ」と向かう気にさせる一服となりました。お土産のコングレバックは長崎

名物をプリントした4種類の図柄のトートバッグにしました。ランチョンなどのお弁当も医局で試食会を行い、投票で決めました。長崎の特徴を出せた美味しいお弁当になりました。座長、招待演者の皆様には長崎の本鼈甲の動物ストラップを会長が選びました。

懇親会は野外でグラバー園から行いました。この風景は世界3大夜景に選ばれたものです。また今年2015年に世界遺産に選ばれました。2年後の天気予報には良質なエビデンスのある予報もガイドラインもないので、「雨がふったら没法子(メイファーズ)」でいこうと決めました。蛇踊り、皿うどんの細麺と太麺の食べ比べはいかがでしたでしょうか？

8時半からは目の前の港(大波止港)から、30分間も花火が上がりました。皮膚科学会史上最も豪華な花火だったと自負しております。目の前の高さに上がった花火がきれいに何発も途切れること無く花開

くのを見ることができるベストポジションのグラバー園を皮膚科の皆様にご提供でき、それを満喫して頂けたのは主催校として幸甚の至りです(因みに、あの花火は、借景としてのものです)。



おわりに

何年か経った頃、今回の長崎の学会が「皮膚病の勉強をもっとやろうと思ったきっかけになった」、そして「なにしろ豪華な花火の学会だった(笑)」と思い出してもらえると幸せです。

本学会に参加頂きましたすべての皆様に感謝致します。

